



「食料品のはやし」の店員のみなさん、住み込みで働いている人も多かった。



沿道からの拍手喝さいが聞こえてきそうな秋祭りの様子、仮装行列は「キツネの嫁入り」。

戦後間もない商店街で、落胆する雰囲気を消す原動力となったネオンの輝き。新町通りは、それぞれの店による電飾に彩られ、次第に活気を取り戻していった。車のない時代は、列車の乗車待ちの人たちで夜遅くまでにぎわいを見せた。



子どもたちの歓声が響いた街並み。



街は祭りのステージに

街のイベント合音  
心つないでできた  
街が舞台の催し物

昔から催し物を大切に  
してきた金田商店街。  
昭和41年には金田町制  
50周年記念の祝賀イ  
ベントの舞台になりま  
した。昭和51年の夏に  
始まった「カナダフェ  
スタ」もその気風を受け継ぐイベントの  
一つ。当初は5日間の「夜市」として  
開催され、お買い得商品を求めて集  
まる人出で連日大盛況。工夫と努力  
を重ねて培ってきた手づくり行事は、  
回を重ねるにつれ内容も多彩になり、  
街の夏の風物詩となっていきました。



子どもの楽しみのひとつ、紙芝居。カチカチという拍子木の音に誘われて、昨日の続きを見ようとみんなが集まってきた。5円で買った水あめをなめるのを忘れてしまうほど、おじさんの名調子に夢中だった。



45年前、誰もがやったポーズ。



子どもたちはよく親の仕事を手伝い、家族はいつも同じ空間で過ごした。

銭湯から案内が届く。各家庭にお風呂がなかったころは大衆浴場もふれあいの場に。



商品を配送した当時話題のバイク

底力 | 商店街が積み上げてきた宝物

# 人と街との絆

肩を寄せ合い、助け合いながら  
戦後の再興を果たした商店街。  
物は少なく不便だったけれど、  
心はいつも満たされていた。  
強い絆とつながりがそこにあった。

## 光で取り戻した輝き

「売るものがない」「食券や衣料券がないと物を買えない」。そんな戦時中の昭和初期、物資不足で食べるものも着るものも少なく、十分な品ぞろえもできずに閉店してしまう店が次々と出てきました。逆に、国のエネルギーを産出する炭鉱では人手が足りなくなり、商売をやめて入坑していく人も少なくありませんでした。やがて金田商店街は、戦争によってその機能を失ったまま、終戦をむかえます。

昭和28年、戦後の再開をめざす金田商店街に、さらなる苦難が押し寄せました。地元の三菱金田炭鉱が閉山、続いて竹本坑、神崎坑と相次いで閉山し、周辺人口が著しく流出。売上減少のダメージをまともに受け、各商店は再開の出足を大きくくじられるかたちとなっていました。

このピンチを乗り切るためにどうしたらいいか……。考えた末、金田商店街が出した答えは「客と店を元気にするため

の演出」でした。商況挽回のため、新町通りの600mの街筋にネオン街を浮かび上がらせ、自らと人々を活気づけたのです。それぞれの商店が特色を生かしたネオンを取り付け、街と人の心を優しく照らしました。なかには京都大橋に傘をさした舞妓さんのデザインが道幅をまたぎ、向かいの軒まで借りるほどの大きなネオンも現れ、見る人の心を奪ったといえます。やがて映画館の前には、飲食店、菓子店、カフェなどが建ち並ぶようになり、パチンコ店も10数軒を超えるまでになりました。

## 何より大切にしてきたもの

商店街が利益より大切にしてきたもの。それは、店と客という絆を越えた人と人との「つながり」でした。冠婚葬祭の手伝いをはじめ、世話やしつけ、おせっかいまで「親せき以上の付き合い」がありました。商店街には、客の子でも本気で褒めて叱ることができる大人が当たり前のようにいたのです。

そのような、あたたかく見守られる雰囲気の中で、いつも日が暮れるまで元気に遊んでいた子どもたち。みんな、心ときめく商店街というステージで、生きる力や社会性を培っていきました。決して直接の利益にはならないけれど、金

田商店街は、そんな「つながり」を大切にしてきたのです。

また一方で、七夕祭りや仮装行列、秋祭りでの山笠競走など、人と地域が楽しめ、街が一体になれる催しにも情熱をそそいできました。

貧しくて不便だったけれど、明るい未来を信じて、肩を寄せ合い、助け合いながら生きてきた戦後の昭和。「これから先はきつと良いことがある」そんな期待に満ちていました。物が豊富で便利になった今に比べ、幸せが実感できた時代、生きる手ごたえがあった時代と言ってもいいでしょう。

たくましくと人の情にあふれ、底抜けの明るさとバイタリティー(活力)で苦境を乗り越えてきた金田商店街。「つながり」を最も大切にしてきた街のあたたかい心は、今も昔も変わることはありません。

## ● interview

ただ食料品を売るだけでなく、その食材を使ったおいしい調理法を教えるなどのやりとりもお客様にたいへん喜ばれましたね。とにかく商いは正直に、ウソをついて売するような商売は、一切しませんでしたよ。



「林食料品店」初代竹崎昇造さん(金田人見)